

美しい島、三宅島。

三宅島の未来づくりには

あなたも参加しませんか？

帰島支援事業中間報告書



三宅島災害・東京ボランティア支援センター  
帰島支援事業中間報告書  
第三版

2005年8月31日

2005.08.31

## 三宅島災害・東京ボランティア支援センター 帰島支援ボランティア活動事業報告

三宅島災害・東京ボランティア支援センター事務局

2005年7月31日、4年半にもわたる避難生活を経て、今、全島避難指示解除から6ヶ月が経ちました。三宅村が設けた三宅島への帰島期間を終え、多くの三宅島島民の方々が本格帰島を果たしました。

三宅島災害・東京ボランティア支援センターも島民の方の帰島に合わせ、2月1日からは三宅島島内で活動を始めています。

ここに簡単ではありますが、活動開始から6ヶ月の「活動人員」「対応ニーズ」を記します。

活動期間 : 2005年2月2日～7月31日(186日間)

活動人員 : ボランティア活動参加者 897名  
ボランティア活動のべ活動人員 5225名

対応ニーズ : 604件

引越し時サポートニーズ 58件

生活環境サポートニーズ 536件

除灰作業ニーズ 82件

萱・竹・草刈作業ニーズ 215件

家屋内外清掃作業ニーズ 164件

(廃家財搬出作業含む)

その他作業ニーズ 75件

今回の帰島支援ボランティア事業は、数多くの団体・企業・個人の方々からのご支援・ご協力によって運営されています。今回の報告では支援団体・協力団体の記名を省かせていただきます。

## 帰島支援活動でわたしたちが求めたもの

予期されていたこととはいえ、予想外の展開となった2000年の三宅島雄山噴火災害。5年におよぶ長期避難生活、引き続く火山性ガスの発生、生活環境の破壊、そして、三宅島島内でのくらしの空白と、5年間という加齢。

わたしたちは、このような課題を抱えた被災者へ深い同情を持って心からはげましを送り、更には、ささやかであるかもしれないが精一杯の自立への支援をおこなうことを通じて、島民・ボランティア双方への新たなメッセージの発信がおこなわれました。



今回の帰島支援ボランティア活動を通じて、島民とボランティアには強い信頼感が生まれました。

## どこまで実現できたのか？

### 帰島島民の前に立ちはだかるさまざまな厳しい現実

帰島の判断・決断自体の厳しさ …… 帰島島民の減少  
帰島後の暮らしの再建への厳しさ …… 医療・福祉・経済  
コミュニティの再建

このような状況の中で、支援センターは暮らしの再建への第一歩の支援活動に徹しました。したがって、その活動は極めて限定的活動ではありましたが、897名が活動に参加し、のべ活動人数は5200名にもなりました。

準備期間と撤収期間を含めた2005年1月27日より8月24日まで、実に200日を超える間、一日も休まず、支援センターの旗が島内各所に立てられ、赤い帽子をかぶり、笑顔で島民に接するボランティアが、引越しを手伝い、灰を掘り、カヤを刈り、草木を刈り、苗場を開いてきました。

各団体から提供された14台の支援センターの車両が島内を移動するたびに、島民は励まされ、ボランティアが活動し訪問する高齢者宅は、数日間「ひとりではないという安心感」「祭りのような高揚感」を醸し出していました。

同時に、年齢等の理由で直接的な支援ができずにいた中年層の島民からもボランティアは高く評価され、赤い帽子のボランティアは全島・全島民の深い信頼の中で活動が続けられたのは全くの幸いなことでした。



数多くのボランティアが今回の帰島支援活動に参加してくれました。ひとりひとりの「赤帽子写真」は支援センターの壁に貼り出しました

## なぜ実現できたのか？

### 島民とボランティアの深い信頼関係の成立

被災地で被災者を支える活動の最も重要なことは「深い信頼」であることをわたしたちは知っており、避難生活中の4年半にもわたる支援活動で、この信頼関係が成立していたことが今回の帰島支援活動を効果的に進める最大の要因でありました。

避難中に都内で開催された「第9回三宅島島民ふれあい集会」でのひとコマ。「ふれあい集会」をはじめとするさまざまな支援活動が信頼関係を成立させてきた



### ニーズの詳細の「事前打ち合わせ」の実施



すべての現場は事前に島民と打ち合わせをおこない、現場環境、依頼者の置かれている現状を把握した上ですべての活動がおこなわれました。正確な現状の把握と、事前派遣体制を構築したことが、島民の方々の要望と支援活動のズレを生ませないことにつながりました。

支援センターに依頼があった場合は事務局メンバーが島民の方のお宅を訪ね、依頼内容はもちろんのこと、困っていること、相談ごとなど、さまざまな話をしながら現状を把握しました

### 派遣されるボランティアの制限

今回の支援活動のひとつの特徴をこの点から見るすることができます。派遣されたすべてのボランティア希望者は、組織・団体からの派遣とし、事前研修会で支援活動の目的と内容を理解していました。

また、派遣という方法を取ったことにより、今回のボランティア参加者は大多数がボランティア活動へ初めて参加する「社会人」が中心でした。しかし、ボランティア活動が初めてでも、今現在、社会の中で役割を果たしている方が参加したことが、この活動の質を高める結果となりました。

これら社会人の層は、一般的に最もボランティア活動に遠い存在として考えられていた面があります。しかし、派遣システムの完成による、社会人の本格的参加は、この活動の中で大きな役割を果たしました。

## ボランティア同士の交流と高いチームワーク



支援活動期間中、社会人ボランティアだけの日はありましたが、社会人ボランティアがいない日は一日もありませんでした

今回のボランティア活動は「除灰」や「廃材搬出」などの「肉体労働」が中心となりました。しかし同時に、これらの肉体労働のような活動を共有することによって、ボランティア同士の交流は連日にわたり、また強いつながりとなりました。交流の場では、ボランティアの交流だけではなく、三宅島支援活動の意味について、来たるべき災害に備えてすべきことについてなど、さまざまな現状や課題について交流がなされ、高いチームワークが保たれました。

## 支援活動を支えた確かな後方支援体制

広報・情報発信・ボランティア受付・事前研修・ボランティア派遣管理・東海汽船との調整と、さまざまな活動を後方支援活動とし、東京事務局でおこないました。これら後方支援の役割と、それを支えるボランティアたちによって、三宅島現地の支援センターが支えられました。



20回にもわたる事前研修会は後方支援を担った東京事務局のボランティアによって支えられました

## 組織的確認に基づく後方支援の役割

多くの団体・組織が今回の支援活動に本格参加を表明し、組織的合意に基づき、財政支援に取り組み、ボランティア派遣を実施しました。

市区町村地方公務員の方々は労働組合を通じ、災害ボランティア活動休暇の発動をおこなう環境を完成させ、東京都職員労働組合に所属する方々は、東京都との交渉を通じて新たな特例を確認し活動に参加してくださいました。

民間企業の中でも、この活動を機にボランティア活動休暇が新設された例もありました。また、一部の大学では、この活動に参加することにより、単位取得を認めるという動きも見られました。

派遣と同時に財政支援は重要な課題でありましたが、第一期三宅島帰島支援活動を支える財政支援は4152万4128円にも上りました。

## 帰島支援活動の到達点

### 数量的に表れない島民の反応

- ・ 赤帽子の皆さんがいたから帰島を決意したという人々
- ・ 帰島し、厳しすぎる現実を前に立ちすくんだ時、赤帽子のボランティアがそばにいてくれて暮らしが再建できたという人々
- ・ 明るさを取り戻す人々の笑顔
- ・ ボランティアの直接的経済効果を評価する人々。赤帽子の活動は被災者の直接的経済負担を1～2億円分軽減し、その分、高齢者の暮らしに役立ったと評価する人々
- ・ 島民の多くの人々がボランティア活動の意味を感じ始め、引き続き残される課題への取り組み意欲が高まりつつある現実

### 支援する側の人々に与えた影響

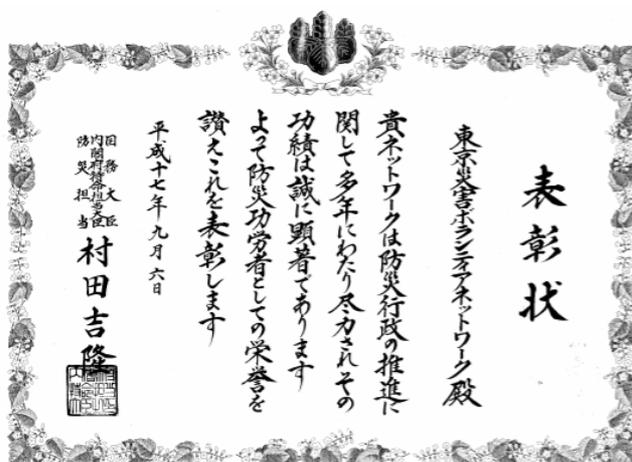
- ・ すべての参加者からこの活動に対する高い評価を与えられる  
日常の暮らしを離れ、多くの困難を解決しつつ参加したボランティア。この活動のテーマ「やさしさと労働」を中心とする被災者支援活動の中で、この種の活動の意味の深さと重要性を知り、三宅島島民への深い同情と、今後の友情の基が作られた
- ・ 参加支援組織からの評価
  - たくさんのご無理なお願いを申し上げたにもかかわらず、多くの参加団体から高く評価される活動となった
  - 帰ってきたメンバーの顔の輝きが違った
  - 自分の所属する団体・組織への信頼度が増した
  - 構成メンバーからの評価が高まった
  - 協働事業を通じて、多くの団体の皆様との連携と信頼が深まった
  - 集団としての成熟度が高まった



何よりもこの笑顔がその到達点を示しています

## 感謝状

三宅島島内 5 地区の自治会長より、また、三宅村行政より、この間の「三宅島帰島支援ボランティア活動」に対して感謝状をいただきました。支援センターの全ボランティア島内撤収の日となった8月23日、三宅村役場にて「感謝状」の贈呈式が行われました。



また、東京災害ボランティアネットワークが、三宅島災害・東京ボランティア支援センターの設立団体の一つとして、この間の三宅島帰島支援活動が評価され、平成 17 年防災功労者防災担当大臣表彰を受賞しました。

## 第二期の支援活動 みやけじま<風の家>の開設

支援センターは当初計画していた通り、引き続き多くの関係団体や島民の皆様と協力し、40%をはるかに超える高齢化率が予想される今後の三宅島の中で、高齢者の暮らしの支援を目的とする、「みやけじま<風の家>」を開設します。



2005年2月よりの帰島期間が終了し、2,200名ほどの島民の帰島が実現されました。8月31日現在に発表された統計によると、65歳以上の方が42.6%という超高齢化自治体となっており、更には加齢によって人口構成の変化が起こることが予想されます。そんな中、地域老人会などの再建課題、医療や福祉の環境整備など、高齢者を中心とした課題が島内には山積しています。

三宅島阿古地区に設置される「みやけじま<風の家>」では、支援センターとは別の形での復興支援となります。島民の善意(島民ボランティア)を中心にしつつ、三宅島の中で、主には「高齢者の見守り」を意識した活動を継続します。また、帰島支援活動を通じて三宅島とのつながりを持つことになった、ボランティアの方々、企業・組織・団体の方々和三宅島をつなぐ役割も果たしていきます。



「みやけじま<風の家>」となる民家は、三宅島の名棟梁、故宮下英雄さんによって建てられた関東大隈流指物民家です。20年前に「棟梁に学ぶ家」として建てられた家が日本建築学会の「三宅島研修所」として使用されていました。

今回、みやけじま<風の家>は、この民家をお借りしての設置となります。

故宮下英雄さんの息子である宮下文雄さん。文雄さんも「みやけじま<風の家>」を応援してくれている



この民家も例に漏れず、5年間の全島避難の間に、荒れてしまっていた。8月上旬に、中で人が生活できるレベルにまで屋内外の片づけを済ませることができた



# 三宅島帰島支援ボランティア事業会計収支報告書

2004年11月15日から2005年8月31日まで

三宅島災害・東京ボランティア支援センター

(単位：円)

科 目	金 額		
	金 額	小 計	合 計
収入の部			
1 寄付金収入	41,454,697		
2 雑収入	69,431		
収入合計 ( A )			41,524,128
支出の部			
1 事業費			
ボランティア船賃	6,966,410		
ボランティア食事代	13,186,358		
ボランティア保険加入料	551,700		
車両費	1,994,590		
資機材購入費	366,634		
のぼり・横断幕作成費	193,200		
ボランティア帽子作成費	1,060,000		
パンフ&ポスター印刷代 (広告費含む)	1,536,150		
報告会・報告書	1,061,460	26,916,502	
2 管理費			
荷造運賃発送費	498,101		
旅費交通費	56,750		
通信費	661,404		
消耗品・事務用品費・その他	1,001,657		
光熱費	267,769		
人件費 ( 5 名分 )	7,172,366	9,658,047	
支出合計 ( B )			36,574,549
収支差額 ( A ) - ( B )			4,949,579



三宅島災害・東京ボランティア支援センター事務局(東京事務局)

〒162-0823 新宿区神楽河岸 1-1 セントラルプラザ 10F

東京ボランティア・市民活動センター気付

TEL 03-3260-7573 FAX 03-5229-1646

e-mail [tokyocenter@cmpo.org](mailto:tokyocenter@cmpo.org)